

地域社会における絵本の可能性とは

企画者 仲本 美央

2023年12月23日(土)の第1回コロキウム「子どもの発達から考えるナマハゲ」、2024年2月18日(日)の2023年度第2回「八戸えんぶりから考える子どもと祭り」に引き続き、2024年度の子ども学会議の開催場所である認定こども園八戸文化幼稚園において、2024年8月3日(土)に第3回コロキウム「地域社会における絵本の可能性とは」を開催しました。

絵本は人々の暮らしにおいて、身近なものとなっているだけでなく、生活における一つの文化財として、小さい赤ちゃんの頃から出会い、触れ合い、周りの人と共にその楽しさや面白さなどを分かち合えるものです。家庭はもちろん、日常生活のあらゆる場所で絵本と出会うことができます。地域の書店、図書館、保育園や幼稚園、児童館、公民館、子育て支援センターだけでなく、病院、カフェ、商業施設などのように、地域の人々が集まる場所に置かれ、親しまれています。第3回のコロキウムでは、絵本が地域における大切な文化財となっている中で、それは地域社会においてどのような可能性が秘められているのかについて考え合う機会としました。その際に、考え合う指標として立てた問いが以下の3つです。

1. 絵本にはどのような役割や可能性があるのか
2. 地域社会において絵本の可能性を生かし広げるには
3. 絵本専門士や認定絵本士等に期待される地域での役割とは

児童文化財というモノとして絵本を捉えるだけでなく、絵本そのものを活用する現場とその現場で関わり合う人を含めた問いについて考えるために、話題提供者として八戸文化幼稚園園長の油川育子氏、同園の絵本専門士である高橋智子氏、絵本研究に取り組む油川さゆり氏、そして、指定討論者に絵本専門士であり、絵本を読みあう現場の研究に取り組む小屋美香氏を迎えて当日のコロキウムは進行していきました。それぞれの立場から地域社会において絵本と触れ合うことに関するご知見についての話題を提供していただきました。さらに、サプライズゲストとして八戸市ご出身の絵本作家である松原典子さんにもご登壇いただき、自らの絵本作家になるまでの経緯や絵本完成までの制作活動の様子、親子が絵本を読む活動に関するお考えなどについてお話しをいただきました。(以上の当日のそれぞれのお話しについては、配信予定の動画をご覧ください)。その後の指定討論では、全ての登壇者によって絵本を通じた活動または環境で新たなエネルギーが創生されていることが語られたことから、それが絵本の力や魅力となり、地域社会におけるあらゆる可能性となっていることを再認識する時間となりました。

対面ならびにオンライン合わせて総勢60名ほどの参加者とのディスカッションの時間では、書面での質問用紙の内容に基づき、議論が深められていく中、特に、絵本から読書というひとりで読む楽しみへと移行するためにはどういう工夫が必要なのかに関して登壇者によるさまざまな意見が踏まえられた提案が繰り返され広がっていました。

参加者には、学校司書や大学教員、絵本専門士など日常から絵本に関係している方々も多く、コロキウム終了後のアンケートからは「保護者の知識や力ではうまく子ども達に伝えることは難しいですが、保育環境の中に絵本専門士がいるのは人生において重要なターニ

ングポイントになると感じました。」「現場で子どもに本をすすめる際に興味を引く対話の大切さを再認識しました。」「絵本専門士の介入による効果の調査が興味深かったのと同時に、子どものリアルな視線に学ぶことがたくさんありました。」「文化幼稚園様の心身面、物理面の環境は素晴らしいことは言うまでもありませんが、どんな環境の中においても一冊の絵本はいろんな形で大きな役割があるのではないかとあらためて認識いたしました。」など、地域社会において人々が絵本を楽しむ環境づくりを行うためには物的環境というハード面と人的環境というソフト面の両側面から構築していくことの重要性を再認識していた様子が数多くありました。

最後に、第20回子ども学会学術集会開催について副大会長である安藤寿康先生より告知され、閉会となりました。閉会後も、会場のあちらこちらでは登壇者と参加者の会話が続き、学び合いの時間の終わりを惜しむかのような雰囲気漂う中で、第3回コロキウムは無事に終了となりました。

